Takaoka Craft Ichiba-machi

―誰のために何を目指すか―

「高岡クラフト市場街（いちばまち）」2014

富山大学客員教授　松原　博

2014年10月第３回目の「高岡クラフト市場街」が実施された。３回の流れ、そして今回の概要から今後「市場街」はどうあるべきか？また目指すべきところは一体どこにあるのかについて考えてみたい。

■2014の概要そして課題

2012年「高岡クラフト市場街」は、「工芸都市高岡クラフト展」の活性化を目的として初年度「クラフト」にかかわる既存イベントと新規イベントを集合させたイベントとして発足した。２年目はクラフトと「食」の楽しみを加え、さらに３年目はクラフトを「体験」する要素を加味した構成とした。この流れは、クラフトをコアとしながら、日々のライフスタイルの変化に呼応し「市場街」イベントの具体的な切り口をわかりやすくかつ盛り上がりを期待する企画の変更でもあった。

一方で開催の経験を重ねることから色々な課題も見えてきた。直接的にはイベントの「量と質」のバランスであり、俯瞰的にみると「誰のための何のイベントであり何を目指すのか？」だと言える。

「質」の保証として、個々のイベントの内容改善に加えて、運営面では、スタッフ間のそして末端までのコミュニケーション精度のアップが必要であり、事業の継続的な発展維持の観点から「志集団」から「事業を構築する集団」構造へ変え運営の安定化を図る必要が出てきた。さらに体制として瞬発力（個々のイベントや期間中の対応）と持久力（長期に目指すものへの考え方）の明確化の必要性も見えてきた。資金面では助成金主体から受益者負担、売上金、地場からの協賛金が主体となる資金構成を目指す必要がある。

これらは、「市場街」が「誰のための何のイベントで何を目指すのか？」につきる。

■イベントがめざすところ

「市場街」の比較として各地で行われているイベントを「まちおこし」や「まちづくり」の観点から見てみたい。「**松本クラフトフェア**」は30年の歴史の中で、「高岡クラフトコンペ」とは異なるいわゆる「コミュニテイ型フェア」の一つの形を造り上げ、地場に観光資源という形で還元している。燕三条の「**工場の祭典**」は「高岡クラフトツーリズモ」に似た形で地場産業のビジネスチャンス拡大を図り、東京台東区の「**モノマチ**」は下町台東区のものつくりの街に人のにぎわいをもたらし、もつくり関係者の交流さらには小売の売り上げアップを図る。

では「高岡クラフト市場街」は何を目指すのか？

それは我々の街「高岡」の恒常的な活性化を目指すことにあると考える。これからの日本を考えるとき「循環型経済」と「地方」が大きなキーファクターであり、高岡市が掲げる「文化創造都市・高岡」のビジョンプランは「地方創生」のひとつの切り口だろう。

全国各地のまちづくり、まちおこしのイベントは、二つに大別できる。ひとつは京都祇園祭に代表される伝統的資産・まつりを基盤とするもの、そして最近、全国各地で地場産業に直接、間接かかわる新しいものがとみに増加している。これらはいずれもイベントによる賑わいの創出であり、特に後者はイベントごとの瞬発力からそれを重ねることによって生まれる地場自身の持久力アップ、恒常的な街の活性化だと考える。これらの活動は、その「街」の持つブランド力を高め、「行ってみたいまち、住んでみたいまち」と呼ばれることを目指すものだろう。

行ってみたい魅力、住めばそこに仕事がある・・・

この実現へ向けた最大の課題は、地域からの参加が自発的に生まれ、新しい形でのコミュニティーの臨界状態が生じることであり、地場のバイタルな人口が増える街へ変えていくことだと考える。

■産学官かかわる組織とその在り方は・・・

ここ高岡で「市場街」にかかわるいくつかの組織の現状と新しい動きとなる部分、課題を見てみたい。

「伝統産業青年会」

高岡の職人集団、メンバーの大半が、職人であると同

時に規模は異なるが経営者集団でもある。そこには経営者としての資質養成と街への積極的なかかわりが必要となる。

「まちっ子プロジェクト」

高岡のまちが抱えている様々な問題を「まちなか」居住を推進することで、解決策を考える地元５人の中堅市民＋東工大や芸文学生の集団。古民家活用でその活動を広げつつある。

「芸文ギャラリー」

芸文の授業成果、制作活動の発表の場から、地場企業との連携とユニークで刺激のある発信を続ける。

「かんか」

金屋町の一角に、若手金属工芸作家たちがオープン、作家活動と同時に高岡銅器の職人の街・金屋町の文化を守り伝える役目も担う。

「クリエイ党」

芸文学生のものつくりサークル。学生の新鮮なアイデアと地場技術のコラボからクラフトコンペに挑戦。近年地元企業への就職も増加、卒業生を含む大きな連携が考えられる。

「富山大学芸術文化学部」

2015年学部創設10周年を迎える。成熟時代といわれる中でデザインの対象が「もの」から「こと」、「ひと」そして「社会」まで広がるとき、これからの大学はより本来の「考える」教育、そして地域連携の中に実践を通して大学その存立基盤を求めてゆくべきだろう。

これらの一部の例は、高岡で時代の変化に対応しながら、自分たちを含めどのように街を育てていくか、そしてかかわっていくかの活動をしている人の集団や場所と言える。

そして「まちづくり」の運営と組織体制の最大の課題は、行政、自治会とのかかわりと考える。戦前戦後を通して地域住民と行政の「関わり」が大きく変化し、街が「生業」の場所から「住む」街となり、地域共同体という概念が急速に薄れ、従来あった「地縁型コミュニティ」が消滅しつつある。また行政も環境インフラ維持、高齢者対策などが主要業務となり、結果として、公共の「公」優先、「共」が置き去りにされつつある。

「住民参加」とは、「私」が集まり、共に「公」をなす。行政府がそれを率先すべきという考えもあるが、「官」には「共」をデザイン実行する感覚が乏しい。ではそれに代わる実行機能、組織はどうあるべきか？

いわゆる「官製」プロジェクトではない「地場」プロジェクトに対して「官」「自治会」がどうかかわるのか。ここに新しいかつ適切な動きが見えたとき、それは本物といえるだろう。

「高岡クラフト市場街」がその一つの対象として意味と価値を持つものとして育ってゆけばよいと考える。